

〈祈りのために〉

「闇の中を歩む民は、大いなる光を見、死の陰の地に住む者の上に、光が輝いた。」
(イザヤ書第9章1節)

イザヤの預言は、国の滅びを前にして深い絶望の中にある民に希望の灯をともし、理想の王による支配の時代が、やがてやってくることを告げています。

「ゼブルンの地、ナフタリの地、海沿いの道、ガリラヤ」(イザ8・23)は、かつて北イスラエル王国の領土でしたが、今はアッシリア帝国に占領された土地です。それらの土地がイスラエルに救済の日が来た時に回復させられると預言しています。

回復の喜びは、闇の中を旅してきた者や、収穫にあずかる者の喜び、また、戦いの勝利によって得た戦利品を分け合う時の楽しみのようにと語ります。この表現は、当時の人々の暮らしに根付いた喜びを詩的に語っていますが、単に詩的な表現に留まっているのではありません。「闇」という言葉は、単に「闇」、「暗黒」と言うだけではありません。当時のヘブライ人の思想では、創世記1章2節に「地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、」(創1・2)と書かれていますように、隠された、何が起こっているのか分からない、まったく光の差し込まない状態、また、場所を表します。したがって、ひとたびその中に足を踏み込んでしまうと、生きている者の世界から永遠の隔たりを意味します。それは、生きているにもかかわらず、生に対して何の希望も持てない、死んだのと同じ状態です。

イザヤはこのように希望を失った「暗闇の中に歩む民」「死の陰の地に住む者」に救済の預言を語るのです。しかし、アッシリアの暴力的な支配の下で苦しみ、屈辱と絶望の中で生きなければならないのは、前提があるといえます。イスラエルが暗黒の状態にまで落ちたのは、イスラエルが、神から離れ、自分たちの不信仰の罪だったと指摘します。しかし、今そのような罪の中にいる民にも光が輝くと預言しています。自分たちの罪のゆえに闇の中を歩んでいた者にとって、光が与えられるということは、まさに大きな希望と言えるでしょう。それは生きる気力を失い死んだ状態にあった者に、新しい命が与えられることなのです。預言というよりは、イザヤの神讃美といえる言葉です。

しかし私達は、イエス・キリストの出来事なくしては、イザヤの言葉を正しく理解できません。イザヤが証言し、讃美した神の熱意は、イエス・キリストの出来事のなかにはっきりと見ることが出来るからです。神は御子を世に送られ、このお方を信じる時こそ、暗黒の中に差し込む真の光であると悟ることが出来るのです。

しかし、人間の欲望は平和を求めず戦いを引き起こし、神が創られた世界を暗黒にしてみました。現在もその状況は変わりません。その暗黒の世界に真の光としてイエス・キリストが来て下さいました。今年もクリスマスを迎えようとしています。謙遜にかつ従順に、御子の御降誕を待ち望む信仰の備えをしたいと思えます。

〈祈り〉 父なる神さま。世界中の人が御子の誕生を心から祝い、御子が十字架で顕わして下さった愛によって真の平和の願いを実現してください。

傳 英二(尾道西教会牧師)

「キリストの証人として」

小野寺ほさな（荻窪北教会牧師）

1979年4月、東京神学大学に入学した私は、部屋数少ない女子寮の二人部屋に入寮しました。そこで同室になったのは、愛知大学卒業後、就職経験もある在日大韓基督教会在籍の3年次編入生でした。緊張しながら始まった神学校生活でしたが、とても朗らかなこの先輩のお蔭で楽しいものとなりました。お互い共同生活にも慣れてきた頃、夜な夜な「あんたらは歴史を知らんだろう！」「あんたらはうちに何して来たか知つとるか？何も勉強しとらんだろう？」「ちゃんと勉強せなあかんでえ！」と諭されたことは今でも忘れません。確かに高校を卒業したばかりの私は、在日韓国人のことも、韓国と日本の歴史も全く知らないばかりか、韓国人や在日韓国人に対し日本が何をして来たか、何も学んでいませんでした。知ろうともせずに過ごしてきたことをとても恥ずかしく思いました。そのような私に、彼女は自分のことから話をしてくれたのですが、それはまさにカルチャーショックともいえるものでした。

それから30数年、日本キリスト教会の教師として日本軍「慰安婦」問題と関わり、中会靖国神社問題特別委員会や大会人権委員会において奉仕する中で、沖縄、韓国、台湾に行く機会も与えられ、一つ一つ学ぶようになりました。今年は大韓連合教会主催の「メンソーレ沖縄に来てみませんか？」に一日だけでしたが参加し、沖縄での闘いは真の平和を願う全ての人の闘いであることを実感しました。新基地建設反対運動が行われているキャンプ・シュワブゲート前には、赤ちゃんを背負った若い母親もいて「いのちを愛し大切にしたい」との思い溢れるこの闘いへの連帯の気持ちは、一層強くなりました。

今年の「渉外委員会便り」には、カナダ合同教会のフランス語教会統括局長による同教会の「信仰告白」の一部が紹介されていました。そして「この文言は、カナダ合同教会が、キリストの証人として、この世に積極的に関わり続けていくことを端的に言い表している」との説明があったので全文を知りたいと思い調べてみると、次のように続いていることが分かりました。「私たちは招かれている 教会となるために 神が共にいますことを祝うために 他者を愛し 仕えるために 正義を求め 悪に抵抗するために 十字架につけられ よみがえらされた。 わたしたちのさばきと希望であるイエスを宣べ伝えるために。いのちある時も 死の時も 死のかなたにある生においても 神はわたしたちと共にいます。神に感謝」。とても分かりやすく教会の使命を明確に言い表しています。「他者を愛し 仕えるために 正義を求め 悪に抵抗するために」と、具体的に一步踏み込んでいることに心動かされました。同時に、私たちも福音に生かされている喜び、神が共にいますとの確信に満ちて、キリストの証人として、この世の問題に積極的に関わり続けていくキリスト者でありたいと思われました。

天皇制を克服することができるか

山口俊夫（小平教会長老）

1969年に国会内で靖国神社国家護持問題が浮上して以来、日本キリスト教会ではその抗議活動を幅広く展開した。その一里塚として1983年に「現代日本の状況下における教会と国家に関する指針」を採択した。この当時、問題の根源は天皇制にあり、しかも、私たち一人一人の内なる天皇制にあることをも知り、深刻な反省を込めて話し合ったものである。

日本人は一般に天皇に対してある種の畏敬の感情を持っているようである。歴史家の見解によれば、数千年前から稲作を始めた日本人は穀物の生育の中に霊力のあることを感じ、シャーマンの儀礼行為を行うようになった。このようにしてできあがった氏族共同体はその先祖を氏神とし、構成員を氏子にした。後に大陸から渡ってきた大王(天皇族)が、氏族共同体を上手に取り込み、自らが、その祭司や、現人神の立場にもなった。そこで、天皇と個人との間には親と子のような関係ができたという。この関係は広く好意的に受け止められるようになり、キリスト教界の先輩指導者も、信仰の教理的な理解が未熟であったせいも、天皇による国体は他国には見られないユニークな形態であると肯定的にとらえたり、天皇家の神事を信仰の土着化をはかるために取り入れたりした。いずれにしても眞の神ならぬものを神とすることは自らのイデオロギーをその神に託し、神聖化することになり、人間の尊厳をも破壊する結果になる。時代は明治維新期になり、政治家たちは日本国を列国並みに強力にしようとして、神聖で冒すことのできない天皇を、国家の元首に置いた。天皇の名の下に築かれた軍国主義国家は無謀な戦争をアジアと太平洋地域に広げ、悲劇的な結果を国内外に残す結果になった。

天皇と日本国民との親密な関係は知日のアメリカ人にもよく知られていたようである。駐日大使であったグルー大使は日本の天皇は女王蜂のような存在で、女王蜂がいなくなれば日本は大混乱に陥ることをわきまえていたようだ。日本に無条件降伏を求めたポツダム宣言の受託は天皇自らの声(玉音)で放送されたため、日本国内ではさほど混乱もなく戦争は終結した。まさしく、天皇の女王蜂ぶりが証明された。

天皇の戦争責任を求める計画はトルーマン大統領の手元や連合国軍からの要請もあったようだが、最高司令官のマッカーサーは河井道や賀川豊彦の助言をも受けて、天皇の戦争責任を問わないことにした。

日本は連合軍の占領の下に置かれたが、神道が天皇制の柱であったためGHQは国家が神道を支援・監督・普及することを禁じた。また、昭和天皇は占領当局の意向を受けて、「1946年の年頭詔書」を発表して、自らの国民との関係は伝統や神話に依っていないことを述べた。「天皇の人間宣言」として知られている詔書である。

新しい日本国憲法を設定するに当たり主権は国民に有ることを宣言する新憲法には、天皇を国家元首であると規定することはできない。けれども、日本国民の天皇の受け止め方から憲法に天皇の国家に対する何らかの位置づけが必要であったことと、日本との交戦国であった諸外国の事情を考慮して、新憲法には天皇は日本国と日本国民統合の象徴であると謳うことになった。「象徴」とはうがった言葉かもしれないが、内容は定まっていない。天皇が人間宣言をしたからと言っても、国民との関係は何も変わっていないのである。実際「1946年の年頭詔書」には「然れども朕は爾等国民と共に在り、常に利害を同じうし休戚をを分たんと欲す。朕と爾等国民との間の紐帯は、終始相互の信頼と敬愛とに依りて結ばれ、…」とある。ポツダム宣言の中に戦後の日本の国体について触れていないとの質問に対して、それは日本

国民自身が決めることである、との回答があったとの記事をどこかで読んだことがあるが、まさしく天皇の象徴の内容は国民の世論が決めることに他ならない。

そもそも、日本人は自分の利害によって何でも神にまつり上げる多神教を奉じる民族であり、特定の信仰を持ち続けることは基本的な人権の一つであるとは思ってもよらないことであり、憲法で定める信教の自由を真摯に理解しようとすることも知らない。政治家たちが大勢で伊勢神宮や靖国神社に参拝したり、司法も信教の自由に関する事例に曖昧な判断を下したりしてしまふ。大多数の国民も天皇を神格化する気持ちを持っているため、文部科学省のような行政機関も積極的に保守的なイデオロギーを促進しようとする。

このような事情の下で、私たちはどのようにすれば良いのであろうか。私たちは神に選ばれ、御子イエス・キリストによる罪の贖いと聖霊による新しい命に与っている群れである。この三位一体の神を共に礼拝し、御言葉の導きを受け続けて行こう。国家・社会が必要とする普遍的な規範を聖書から示されて、世に知らせて行こう。そして、主が弟子たちに残された大宣教命令に喜びと感謝をもって応えて行こう。主の民が増し加えられ、御心に適った世論が興されるように祈ろう。主は世の終わりまでいつも私たちと共におられるのである。

参考書「天皇とキリスト」土肥昭夫・新教出版（2012年）、「日本の将来とキリスト教」古屋安雄・聖学院大学出版会（2001年）、「河井道の生涯」木村恵子・岩波書店（2002年）、「出逢い」武田清子・キリスト新聞社（2009年）

＜ヤスクニ・ニュース＞

「憲法改正」を目指す大規模集会 …主催：美しい日本の憲法をつくる国民の会…

11月10日、日本武道館で「憲法改正」を目指す大規模集会が開かれた。主催者発表で1万1千人となっているが、ほとんどは動員。一般受付（個人）は、人影もまばら。駐車場には大型バスとマイクロバスが計54台。改憲派の国会議員は約40人が出席。ほとんどは自民党議員。多くは安倍首相の「お友達」。次世代の党が3～4人。民主党は一人。

安倍首相は、衆院予算委員会のため欠席。ビデオメッセージで「現憲法は、GHQ占領軍のもとで作成された。今や21世紀にふさわしい憲法を追求する時期に来ている」と伝えた。百田尚樹氏が脚本を手掛けた改憲啓発映画が年内にも封切られる予定。

憲法改正の早期実現を求める国会議員の署名は422名（11月10日現在）。あと57人で3分の2以上となる。大会を通じて前面に押し出されたのは、「中国脅威論」。「憲法改正推進」リーダーは、「今、31都府県の改正推進地方決議が出来ている。間もなく41都府県の決議となる。そうなればいよいよ国会だ」と声を張り上げた。（琉球新報1月19日）

沖縄から

沖縄県議会11月定例会は25日、開会した。翁長雄志知事は冒頭発言で、国土交通相の辺野古埋め立て承認取り消しは違法だとし、代執行を提訴したことに「訴訟の場で、われわれの考えが正当であることを主張し、公約実現にむけて不退転の決意で取り組む」と強調した。また、定例会中に、国相手に抗告訴訟を提起する議案追加を伝えた。

11月18日、辺野古米軍キャンプ・シュワブゲート前座り込み500日を迎え、1000～1200人が集結したため、工事関係車両の出入りや機動隊の強制排除は出来ず、この日の工事はなかった。参加者の一人は、「国が知事の権限をはく奪する県民の怒りは想像よりはるかに大きい」と語り、代執行への反発を指摘した。（沖縄タイムズ11月25、26日、琉球新報11月19日）

731号ヤスクニ通信 2015年12月13日 発行 日本キリスト教会 靖国神社問題特別委員会 発行人 栗田英昭 編集 川越弘 印刷発行 篠塚予奈（東京告白教会） 〒157-0061 東京都世田谷区北烏山 1-51-12 TEL&FAX03-3300-6529
